



熊谷 after 1945

クローズアップヒストリー 第28話 妻沼地区



昭和20年代のお開帳記念の稚児行列
門前町通りを家族の手を引きながら歩き、現在も風物詩になっている。白粉の女の子はもちろん、「革靴とゴム靴」などという看板も興味深い



やはり20年代の仮装行列
行列は下町付近から聖天山前交差点、貴惣門から本殿に向かっていったという。ダルマ、僧侶、茶摘み娘などハイレベルな仮装は、平成以降のハロウィンにつながっている



妻沼県道を進む妻沼線キハ2002号
58年5月31日、午後9時5分発の最終列車は、妻沼県道を牽引されて熊谷駅に回送。翌日、秩父鉄道の電気機関車に牽引されて、羽生経由で東武動物公園に収まり貴重列車として展示されているそうだ。変わった進路は2003号。東船橋駅に近い学習塾に使われている。(以上3点は「ふるさと熊谷」より)

熊谷の戦後74年をひとつのテーマで
貴重な写真とともに振り返るシリーズ。
第28話は先月23年ぶりの聖天様本尊お開帳にわいた
「妻沼地区」です。

工業化、宅地化、 全国均一化の昭和期

「あの頃の男沼の田んぼはねえ、畔(く)がなくて、ずっと水がいつぱい広がってねえ」
昭和5年玉井生まれの腰塚松子さんは、夫・秋夫さんの実家である男沼の昭和30年頃を思い出す。玉井・男沼間約7キロ。当時の熊谷市域は、そのくらい多様だった。
南北に長い熊谷市にあって妻沼地区は、洪水から貴重品を守る日向地区に多い「水塚」のように利根川の影響が強い独自の文化を持つ。鉄道の時代までは利根水運の河岸として、また平安の武将・斎藤実盛が創設した聖天様の門前町として形成されたまちと、海拔約30メートルで平らな「妻沼低地」の利根川が運んできた肥沃な沖積土を活かした農村だった。
昭和20年代は、小島地区の8割が天井まで浸水した22年のカスリンはじめ大型台風の影響が連続。一方で小中学校の整備など、戦後の改革が進んだ。先ごろ23年ぶりで賑わった「お開帳」は、戦後最初27年に講和成立、世界平和祈念として行われている。
30年には、旧妻沼町、男沼村、太田村、長井村、秦村で人口約2万3千の合併妻沼町が誕生。この時の町域が平成17年まで続く。役場は当初の大我井神社西から、昭和32年に下町(現・勤労福祉会館)に移転。さらに58年には国道407号沿い、現在の行政センターの場所に移った。
合併以降、高度成長期の妻沼は、近代的な地方都市に発展していく。交通では46年の新刀水橋開通、51年の幅員25メートルの妻沼バイパス(現国道407号)4車線全面開通、公共施設では49年の町民体育館・町民プー

ル竣工、56年の中央公民館竣工、学校では40年の統合が進んだ町立東中・西中完成式、54年に当時の県立高校新設ラッシュの県北最後の妻沼高校が開校した。
このほか、38年にグライダー妻沼滑走場が開設され、63年には河川敷に妻沼ゴルフ場がオープン。福祉先進町でもあり、40年には全国初の障害者福祉年金制度を新設されている。リード^{※3}、シスコ^{※4}、能美防災^{※5}、工場の進出も進んだ。合併直前の平成15年度には、旧熊谷市全体とほとんど変わらない出荷額になる。県営長井団地、日向団地、上須戸ハイソなど住宅地の開発も進んだ。
一方で自家用車普及にともない、48年に深谷へ妻沼行田バス運行が、58年に妻沼線(東武熊谷線)が廃止。昭和の経済発展では、効率重視だった。商店街は周辺の大形店舗に押され、57年をピーク^{※6}に衰退していく。
「埼玉と群馬の県境はどう表現すればいいのかわからないくらい寂しい場所だった」(村上龍「昭和歌謡大全集」^{※7})。熊谷駅で降りた登場人物が訪れるロードサイドの描写だが、これは「妻沼」だけの姿ではない。この頃全国に広がった地方都市、郊外の味気なさを時代感覚に優れた作家が象徴的に表現したものだ。
聖天様ルネサンスとともに再び輝きだした平成期
「平成8年だから40代半ばかな。都市計画の仕事しなかったら、今のおれはなかったでしょうね。地元っていつもそんなもんだったですよ」
妻沼町役場、合併後は熊谷市役所に勤務しながら、「役所の境界」を感じて市民団体「めぬまチャンネル」を設立。観光振興やフィルムコミッション

境内の中は、数々の露天商が並び、御開扉秘仏御本尊を拝観するため、順路通りぐるっと回り大師堂に祀られた御本尊様を拝む事ができた。

フォーラム「妻沼聖天山の信仰と文化遺産の未来をめぐって」
●4月16日(火) 14:00～ 妻沼聖天山石舞台にて
●対談者:妻沼聖天山 鈴木英全、(株)小西美術工芸社 社長 デビッド・アトキンソン
●コーディネーター:熊谷市教育委員会文化財保護担当 山下祐樹

ンに力を注ぎ、現在はフリーの観光コーディネーターとして活動する高際康司さんは20数年前を振り返る。
「聖天様の改修をやるようになっていた時だったし、須藤さんと出会ったのが大きかった」
チャンネルの代表だった須藤見治さんは、映画の専門学校を卒業し都内で写真の仕事をしていたが家庭の都合でUターン。家業の商店を藤川青春館として営業を始めていた。16年のまごころ国体で「グライダーフェア」を担当した高際は、まず須藤さんの写真技術に惚れ二人三脚が始まる。チャンネル最大の事業は、中央公民館で700人のエキストラを集めてロケが行われた「歓喜の歌」制作協力(20年公開。松岡錠司監督)。29年末のめぬま映画祭ファイナルで再上映されている。
平成妻沼のトピックは、何といても16年の熊谷市合併と、15年に平成の大改修が始まり24年に国宝指定された聖天様だ。妻沼アイデンティティを強化した聖天様リニューアルは、多大な影響をまちに与えている。
もちろん、動いているのは高際さんや須藤さんたちだけではない。県北最大のクラフトイベントになった「熊谷妻沼手づくり市をはじめ、さまざまな「縁結び」イベント、大福茶屋、まっち珈琲、ワイズカフェ、焦がし屋武一、金子古家具店、まほろほと次々登場する妻沼リノベーション群、在来大豆を推進する「妻沼茶豆研究会」、観光の「阿うんの会」や妻沼レディスというボランティアが活発だ。バラ園も人気の道の駅めぬま、観光が進んだあじさい寺保護寺といった新名所、さらには「スカイスポーツフェスタ」、高校女子サッカーの聖地「めぬまカップ」といったスポーツイベ

ントも含めて「妻沼スペースリテイズ」をかたづけていいる。
人材も豊富だ。平成以降、芥川賞作家青山七恵さん、フードコーディネーターのSHIORIさん、車イスのシンガーソングライター森圭一郎さん^{※8}が活躍。荻野吟子^{※9}がまちいちばんの有名人であるように、女性上位なのは「妻」が地名になった伝統だろうか。
そして今年4月、23年ぶりの聖天様お開帳。関連イベントにわくわく、いつも青春館で訪れる人におだやかに微笑みかけていた須藤さんが、数年間の闘病生活の末がんに倒れた。最近の高際は、「二粒の麦 荻野吟子の生涯」のロケに奔走している。昨年逝去した俳人・金子兜太さんが詠んだ「荻野吟子の生命とありぬ冬の利根」。道なき道をひらいた明治女性の命を育てた妻沼・利根は今和の世も、冬は赤城おろしに凍え、夏はつかいかた日川面を輝かせる。
【取材:文 小林真(まこと)】
※1 本連載「熊谷の環境」の取材時。夫の秋夫さんは畔がなく、柳なんか立って土地がわかるようになってた。補足する合併協議会メンバーだった奈良村、別府村は熊谷市に併合。
※2 地元の岩崎板金製作所から発展し37年に商号変更。
※3 大阪界から39年に妻沼で東京工場を稼働開始。現・日清シスコ。
※4 39年メヌマ工場落成。
※5 平成7年刊行「未来へ続く妻沼の軌跡」より。
※6 作中「妻沼」は書かれていない。同著より「大きな川があり河原の草が風になびいて、大型のバチンコ屋と自動車のディーラーとパーメンション店の看板があった……。そこまで汚い色を使っておれ達の勇気や元気を奪わなくてはならないのはなぜか?」
※7 「刀水橋」と妻沼(当地ソングは多い)青山七恵(ひとし和)には主人公の同居人71歳荻野吟子が登場。